

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
指導教員	所属・職名		氏名
	立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科・教授		平賀正子 印
自然・人文の別	自然 ・ 人文	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	日欧異文化ビジネスディスコースの対照研究 一時間軸と空間軸の与える影響		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	立教大学異文化コミュニケーション研究科同専攻博士後期課程3年		渡邊京子 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
研究期間	2006年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は国際合弁企業における取締役会のディスコースを主たる研究対象として以下の2つの目的を達成することを目指すものである。第一に、日独の親会社である2つの企業グループに属する関係者の間に時間の経過とともに醸成される互いのパートナー意識の表れ方を分析すること。第二に、2グループの相互作用によって新たに生まれる枠組みである transactional culture の発現を探求することである。これらの分析と考察を通して、益々グローバル化する世界において一国際合弁事業をきっかけに2つの企業グループがいかにして関係を深め、その相互作用の中から互いのパートナー意識を育んでいくかというプロセスを示し、ビジネスディスコース研究として実践的かつ理論的貢献を果たしたい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ビジネスディスコース] [パートナリシップ] [Transactional culture]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

これまでの研究の結果、以下のようなデータ収集の方法、データ分析の方法を取る事に決め、継続的にデータ収集を行いつつ平行してデータの書き起し、分析作業を開始した。それぞれについて詳述し、研究の貢献となる要点とともにまとめた。

1. データ収集

取締役会の音声録音データ、取締役会以外のさまざまなディスコースの参与観察データ、取締役会の主要メンバーに対するインタビューデータの三種類のデータに基づき、分析を行う。

(1) 取締役会の音声録音データ

2006年4月に発足した国際合弁企業 A&B 社の、四半期に一度行われる取締役会の談話の音声録音データである。会議は日英両語で行われるため同時通訳が同席しているが、データとしては、それぞれの発話者が行うオリジナル言語による談話を収録している。1回あたりの会議所要時間はおよそ2時間で、これまで合計4回累計約8時間の取締役会の音声録音を完了し、書き起しを行った。2007年度も継続し、全8回の取締役会の音声録音データを収集し分析することになっている。

(2) 取締役会以外のさまざまなディスコースの参与観察データ

A&B 社の取締役には日本側 A 社グループより4名、ドイツ側 B 社グループから3名が就任しているが、このうちの主要メンバーが関わる取締役会以外のさまざまなディスコースの参与観察を行う。参与観察は A&B 社の設立以前の2005年5月から開始し、両企業グループによる関係樹立や合弁会社設立のための準備期間のミーティングから会社設立後は取締役会内外の諸ミーティング(会食、相手方企業の上部組織代表者などへの表敬訪問その他)までを対象とする長期間の参与観察データである。

(3) 取締役会の主要メンバーに対するインタビューデータ

2種類のインタビューを行う。第一は、両企業グループから取締役会主要メンバー各一名を選び、これまでの両グループの関係の発展に関して時系列に沿った事実を把握することを目的としたものである(背景データ)。第二は、両企業グループから複数の取締役会メンバーに対して半構造化インタビューを行うもので、それぞれのグループが相手企業をどうとらえているかを分析するのが目的である(認識データ)。

2. 分析の枠組み

本研究においてはビジネスディスコースを社会的行動としてとらえ、社会語用論的アプローチ(Goffman (1959, 1963, 1967), Silverstein (2004) など)を援用する。具体的にはまず、言語の持つ指標性に着目し取締役会の音声録音データにおいて呼称表現や直示を分析する。談話の分析に当たってはミクロ(対人)、メソ(対パートナー企業)、マクロ(対パートナーグループ)の3つの視点から分析を行う。また分析に基づいて、これらの2つの企業グループがお互いをパートナーであるとして認識する際に働く個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの役割(Hogg & Abrams, 1988)を分析し、グループの関係性についての認識にこれらのアイデンティティがどのように関与しているかを考察し、パートナー意識の醸成のプロセスを解明する。

ディスコースデータの分析にあたっては言語表現の分析のみでは不十分であり、それを取り巻く周囲の世界の十分な記述が必要だということになる。ここには言語以外のさまざまな記号や、記号装置として働くその場の空間的環境、物理的存在物なども含まれる。

また社会的行動としてのディスコースの連続性を考慮し、一つ一つの特定のディスコースを取り巻くコンテクストの歴史的(時間的)・空間的記述を重視し分析を行う。ディスコースデータのみには頼るのではなく、複数のデータを用いて分析する。つまり両企業グループの関係の時系列的变化を見るために長期間にわたる参与観察を行うと同時に、異なる空間がもたらすディスコースへの影響をも取り込むために、取締役会とは異なるディスコース場面の参与観察も併用する予定である。

研究成果の概要 つづき

Transactional culture についての考察はインタビューデータを主データソースとして分析を行う。日独の A 社、B 社は企業の歴史も大きく異なり、一見対照的な企業文化を持つ。それぞれの企業文化を背景に持ちながら新たな合弁企業という枠組みにおいて相互作用する取締役会メンバーたちが依拠するのは、A 社の企業文化でも B 社の企業文化でもない、新たに生まれてくる transactional culture。ディスコースのミクロの側面として「今・ここ」に指標されるものは、transactional culture の出現のプロセスに他ならない。本研究の目指すものは、ディスコースとコンテクストの厚い記述を通して、パートナーシップと transactional culture の発現のプロセスを分析、考察することである。

3. 研究の貢献

本研究の貢献は以下の 3 つの分野に分類される。

(1) 文化の取り扱いについて

異文化ビジネスディスコース研究の大部分は従来、国の文化(national culture)という概念を文化の軸として位置づけてきた。最近では文化を単一の国の文化からなるものではなく、複層的構造を持つものとして認知する傾向が出てきてはいるが、まだ国の境界線を基に文化をとらえている研究が多い。本研究では、ディスコースを社会的活動としてとらえ、コンテクストは時間的空間的な連続性を持ち、その場その場でダイナミックに作られていくという立場を取る。すなわち文化もこのコンテクストに沿って作り出されていくものであり、移行する性質のものであるとして取り扱う。具体的には、別々の時間的空間的相互作用から生まれた親会社の企業文化が、合弁事業という舞台上で接触することにより新たなコンテクストが更に作られていくことになる。ここに発現する相互作用の共通の枠組みと様態を transactional culture として分析する。

(2) ビジネスの分野における経験的観察に基づく長期継続的研究

異文化ビジネスディスコース研究においてはこの方法論は極めて稀なものであり、かつ日本人を含む研究はこれまで発表されていない。これまで同分野ではディスコースデータの一面にのみ焦点をあてるものが多く、多面的な分析があまりなされてこなかった。本研究では合弁企業設立以前より開始した長期的な参与観察によりディスコースを中心に展開される 2 グループの関係の、発展のプロセスを研究する。

(3) データの記述及び分析についての貢献

ディスコースの「今・ここ」に連続的に指標される多面的コンテクストを、出来る限り時間的にも空間的にも十分に詳細に記述する。また、3 種類のデータを分析していく中で、ディスコース参加者の社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの役割の考察から、2 グループによるグループ間パーセプションの醸成のプロセスに迫ることを目的としている。同一被験者を対象として談話の収集を長期間おこなうばかりでなく、インタビューや参与観察も併用し、得られたデータに対して多面的にアプローチを行うという方法は、異文化ビジネスディスコース研究としては極めて稀なものであるが、一般のディスコース研究の分野でもまだ限定的にしか見られない。本研究で示す理論的枠組み、データ収集法およびその分析は、十分な汎用性を持っているものであり、一般談話分析や異文化談話分析の分野でも方法論的貢献を果たし得ると思われる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

単著、Interaction Ritual of Board Meeting: International Joint Venture Discourse
異文化コミュニケーション論集第5号、立教大学大学院、2007年、pp.77-93.

単著、Framing in Intercultural Business Discourse: With Focus on Differences
Between German and Japanese Managers、異文化コミュニケーション論集第4号
立教大学大学院、2006年、pp.81-96.

単著、多国籍企業社内会議に見るフレームの文化差—日本人とドイツ人の談話データ
から、多文化関係学第二巻、多文化関係学会、2006年、pp.1-14.

③ シンポジウム・パネル

言語と人間研究会 2006年12月

国際合弁企業の第一回取締役会の談話分析：呼びかけ形態の指標性の視点から
日欧合弁企業の第1回取締役会の談話において、親会社であるA社とB社から派遣
されてきた取締役たちがいかにして合弁企業であるAB社の第1回取締役会という
共通の定義に至るかを談話分析のアプローチで探った。

④ その他

学会発表

言語と人間研究会 2006年3月

日本人とドイツ人によるビジネス談話のフレーム分析—発話の序盤、中盤、終盤のフ
レームの対比から— 日独マネージャーの個々の発話を序盤・中盤・終盤に分けそれ
ぞれの箇所に見られるフレーム・箇所ごとの関係性・境界のつけ方などを比較対比し
た。